



関西外国語大学
国際文化研究所

Newsletter

March 31, 2025

No. 15

〒573-1001 枚方市中宮東之町 16-1 関西外国語大学国際文化研究所

■TEL : 072-805-2801 (代) FAX : 072-805-2611 (直)

■URL : <http://www.kansai-gaidai.ac.jp/info/center/irs/>

■E-mail : iri@kansai-gaidai.ac.jp 所長 竹沢 泰子

IRI

The Intercultural Research Institute

巻頭言

竹沢 泰子

はじめに

国際文化研究所は、関西外国語大学の主たる研究拠点として毎年さまざまな研究活動を行っています。大学院の開設に先駆けて 1972 (昭和 47) 年に設立されてから、半世紀以上にわたる長い歴史をもちます。その使命は、学内外の支持と協力を広く仰ぎながら、組織的に行った言語や文化の深層に迫る研究の成果を発信し、学内外に知的交流の場を提供することにあります。この趣旨に沿って、教員・大学院生らによる研究成果の発表、著名な研究者を招いての講演会、学生・市民を対象とする公開講座、シンポジウム、例会、ワークショップなどを重ねてきました。2014 年度からは、IRI 共同研究プロジェクト、言語・文化コロキウム、例会、言語・文化研究フォーラムなどが加わりました。

当面の基幹目標として、以下の四つが挙げられます。

- 言語、文化、社会、教育などの分野を中心として、学内外の研究・教育交流の促進を

として、学内外の研究・教育交流の促進を図ること。

- 共同研究プロジェクト、コロキウム、フォーラムなどの研究交流を通じて、研究活動の一層の活性化を図ること。
- 日本語・日本文化の特質を、外国の言語・文化と比較対照しつつ明らかにし、研究成果を、口頭発表、雑誌論文、研究書などの形で国内外に発信すること。
- 公開講座、コロキウム、フォーラムなどの活動を通じて地域社会に貢献すること。

上記の基幹目標は、一朝一夕でできるものではなく、それぞれ長い年月の積み重ねによって初めて達成できるものです。塚本秀樹前所長をはじめとする先達の築いた伝統を大切にしながら、2024 年度も連続公開講座、シンポジウム (コロキウム)、フォーラムなどを開催致しました。

加えて、コロナ禍で開催が叶わなかったシェイクスピア劇を 5 年ぶりに開催し、また長年休会状態であった例会を IRI セミナーという形で復活させることができました。前者には、1000 名以上が参加し、大変盛況であったこと、またイ・スルギ客員教授による IRI セ

ミナーには、30名以上の参加者の中に19名の学部生がいたこと、彼らが活発に英語で質問を行ったことが特筆すべきことです。また対面とオンラインのハイブリッドで開催したシンポジウムには海外からの参加者もいたこと、対面と並行して録画した明日香壽川教授（東北大学）によるフォーラム記念講演は、世界中の方々が視聴できるように一般公開としたことも本年度の新しい試みとなりました。

末筆ながら、谷本榮子理事長・総長、大庭幸男学長、谷本和子短期大学部学長、さまざまな行事でご登壇・ご協力くださった方々、関西外国語大学の教職員各位、とりわけ研究支援センターの藤井尚之課長、岡田泰広課長補佐、およびメディアセンターのスタッフのみなさまのご支援に心から感謝申し上げます。

（国際文化研究所長、同教授）

2024年度共同研究プロジェクトの紹介

IRI 共同研究プロジェクトは、分野を問わず、2名以上の本学の教員（非常勤講師を除く）が共同で取り組む研究プロジェクトで、その目的は本学における研究と教育の一層の活性化に資することにある。プロジェクトのメンバーの中の一人が代表となり、プロジェクトの中に関西外大大学院在生をリサーチ・アシスタントとして加えることができることになっている。このプロジェクトは、本学の教員（非常勤講師は除く）から公募され、IRI によるレビューを経て、理事長・学長の決定により採択となる。

2024年度に遂行された共同プロジェクトは以下の7件であった。研究成果は第11回「IRI 言語・文化研究フォーラム」で発表された。

共同研究プロジェクト 研究概要・成果

（○印は代表者）

1. 初修クラスにおける中国語文法指導をめぐって：場所名詞が主語にたつ文を中心に

○吉田泰謙（英語国際学部）

相原里美（英語国際学部）

（プロジェクト概要）

中国語の初級段階における文法指導の中で「場所名詞が主語にたつ文」は一般に「〈場所〉＋“有”＋〈モノ・ヒト〉」といった構文を提示した上で、「その〈場所〉にある〈モノ・ヒト〉が存在する」ことを表すという解説がなされる。一方、学習者は本構文がどのような場面・文脈で使用されるのか（使用できるのか）、同じく存在を表す「〈モノ・ヒト〉＋“在”＋〈場所〉」構文とはどういった違いがあるのかという点を十分に理解できていないため、その誤用が後を絶たない。こうした現状を踏まえ、本研究では「〈場所〉＋“有”＋〈モノ・ヒト〉」構文を中心に「気づき」を促す文法指導（島田 2022）を試みた結果を分析し、これを基に存在を表す構文に関するより包括的な指導法を提案した。

（プロジェクト成果）

本研究では先ず場所名詞が主語にたつ文に関する習得状況を把握するために測定テスト

を実施した。具体的には、会話または短文形式の中で〈モノ・ヒト〉の存在を表す際に“有”構文と“在”構文のどちらを使用するのが最も適当であるか、本学英語国際学部1年次開講科目「初級中国語」を履修する学生（計50名）に解答してもらい、クラス全体で答え合わせを行った。その後、測定テストの中で提示した会話または短文形式のコンテキスト（ディスコース）を基に「気づき」を促す文法指導を行い、その効果を検証するために改めて測定テストを実施し、その正答率から「気づき」を促す文法指導による効果を分析した。結果、学習者が各構文の使用場面ならびに両者の使い分けを理解・習得する上で、この「気づき」を促す指導が有効であることが一部のクラスで示された。また本検証結果に基づき、“有”構文を中心とする存在を表す構文（“在”構文を含む）に関して、より包括的な指導法を試案した。尚、本研究成果は関西外国語大学国際文化研究所主催「第11回IRI言語・文化研究フォーラム」（2025年2月15日）にて口頭発表した。

2. 名所旧跡体験と漢字習得：ナラティブ共有の試み

○永富あゆみ（外国語学部）

SHULTZ, John（国際共生学部）

武藤輝昭（外国語学部）

（プロジェクト概要）

関西外国語大学留学生別科過半数を占める非漢字圏出身の学習者にとって、漢字習得は負荷が大きい。日本語能力が限定的であれば、知的好奇心を刺激する教材も少なく、意欲を

失いかねない。一方、英語開講選択科目では、名所旧跡を訪れ学びを深めているが、漢字表記に注目するまでには至らない。

そこで、英語開講選択科目教員と協働し、遭遇する漢字への気づきを促し、長期記憶へ導く支援を検討した。まず、「自ら漢字を探す」仕掛けにより、意識的注意喚起を促す。さらに、漢字の断片的記憶情報が安定した概念に繋がるよう、探した漢字にまつわる個別エピソード共有の機会を共通の物語のプラットフォーム内に含めた。

（プロジェクト成果）

2024年春学期パイロットプログラムとして、①昔話をリライトし、当該学期に扱う漢字をすべて含めたものの動画を作成、②粗筋の把握のため動画を見せ、③学習者が学内外で撮影した担当漢字の写真を共有プラットフォームにリンクし、④担当漢字導入時には、学習者が写真を見せながら紹介活動を行い、④昔話の内容確認や音読活動でふりかえりを促した。詳細は Boston x New York 合同勉強会（BNYSG）ならびに第11回IRI言語・文化研究フォーラムで発表した。学習者からのコメントは概ね肯定的であったが、英語開講選択科目教員との協働による昔話（物語）の選定、共有プラットフォーム開発、視線計測による成果実証は、今後の課題としたい。

3. 関西外国語大学留学生別科日本語科の統一シラバス作成に基づいた中上級日本語教材の開発

○高屋敷真人（外国語学部）

西郷英樹（外国語学部）

倉沢郁子（国際共生学部）

向井絵美（外国語学部）

（プロジェクト概要）

関西外国語大学留学生別科の総合中上級日本語コース（Japanese 5~Japanese 8）では、国際交流基金が2010年に策定したJF日本語教育スタンダードと日本語能力試験の該当レベルを参考に、2023年度秋学期より統一シラバスを作成し試用を始めた。本プロジェクトの目的は、このJF日本語教育スタンダードの理念に基づき、学習者と日本語話者との相互理解のために必要な「課題遂行能力」と「異文化理解能力」をいかに養成するかを考え、新設した統一シラバスに沿って、そのために必要な中上級の日本語教材を開発、作成することである。

（プロジェクト成果）

本プロジェクトでは、中上級学習者の多種多様なニーズに応えるべく、統一シラバスを作成するために、今までの学習者へのニーズ調査や教材研究等の分析を行い、学習者のニーズや興味・関心を起点としてユニットの話題を選び、本文の作成、文型の抽出などを行った。また、文法項目についても、日本語能力試験のN1からN3レベルで扱われる文法項目について文法シラバスの見直しも行った。教材は、留学生のニーズに対応し得るモジュール型教材の形式で教材パッケージとしてまとめ、現在、各レベルで教科書として使用中である。本プロジェクトのこの教材作成の過程については第11回IRI言語・文化研究フォーラムで詳しく実践報告を行った。

4. 中級日本語学習者の日常生活における漢字使用について

○田嶋香織（外国語学部）

宇野聖子（外国語学部）

（プロジェクト概要）

日本語習得において比較的困難に思われるのは漢字学習、特に難易度の高い漢字が増えていくものの生教材を理解するにはまだ未習の表現・語彙も多い中級日本語学習者の日常生活における習得漢字の使用についての実態を調査した。

（プロジェクト成果）

2024年11月22日に早稲田大学の濱川祐紀代准教授を招いて「漢字の教え方ワークショップ 中級学習者への指導について」を開催し、漢字学習に関するアイデアシェア、情報交換等を行った。

また、2025年2月15日「第11回IRI言語・文化研究フォーラム」では、現在使用されている教材の有用性、学習者の学習方法の実態、協働学習における漢字学習の意義と効果的な学習活動の検証についての調査結果を発表した。

5. 日英語アナウンスを対象とした音声学的評価法の検証と教育上の実証

○小谷克則（英語キャリア学部）

前坂麻実（博士前期課程）

大室剛志（外国語学部）

（プロジェクト概要）

従来、第二言語における発音は母語話者の音声をモデルとして評価されてきた。しかし、近年では発話の明瞭性がより実用的な評価基

準として注目されている。本研究では、機内アナウンスにおける発話明瞭性指標の妥当性を検証した。その結果、明瞭性は状況に依存することが明らかとなり、文脈に応じた評価基準の必要性が示唆された。

(プロジェクト成果)

まず、第一の成果は、音響音声学的特徴を適切に抽出するために必要な教室環境（定員の約5倍の広さが必要であること）を明らかにしたことである。第二の成果は、アナウンスの発音評価が文脈に依存することを示したことである¹。第三の成果は、評価者による発音評価と比較し、自動発音評価の説明率が65%と高く、有効性が示されたことである（評価者評価の説明率は35%）²。

今後の課題として、音声分析に加えて表情や動作の分析を行い、総合的な評価手法を確立することが求められる³。

1. 「日英語アナウンスを対象とした音声学的评价法の検証と教育上の実証」, 第11回 IRI 言語・文化研究フォーラム.

2. “The Effects of Acoustic-Phonetic Features in English Proficiency Measurement by Read-Aloud Performance,” 16th International Conference on Education and New Learning Technologies.

3. “The Association between Second Language Proficiency and Nonverbal Behaviors: A Computer Vision Analysis of Head Nodding,” The 38th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation.

6. 言語哲学に基づく国際社会論の再構築に関する研究

○岸野浩一（外国語学部）

小田桐確（外国語学部）

溝口聡（外国語学部）

金樹延（英語国際学部）

(プロジェクト概要)

言語哲学の言語行為論を援用し、ある課題が重要な安全保障問題として立ち現れる言説過程を析出する「安全保障化 (securitization)」の理論について、その射程を国際社会の分析へ拡張する動きが近年提起されている。「国際社会を支える制度・価値観・文化はいかなる言語行為によって正当化されるのか」や「言語行為は国際的な対立や紛争とどのように関わっているのか」などといった、安全保障化に関する先行研究が十分に解明していない問いを分析できる理論の構築を目的として、本研究では、国内外の研究動向をふまえ独自の理論的・実証的検討を進めている。

(プロジェクト成果)

本年度は、災害情報（防災）・軍事同盟・気候変動などの事例研究を本格的に開始または継続的に深化させ、現代世界の諸課題に既存理論と異なる視角からアプローチする国際社会論を言語行為論に基づき再構築することの可能性と意義について、前年度まで以上により様々な領域から検討した。研究の主な中間的成果は、関西外国語大学・国際文化研究所主催の「第11回 IRI 言語・文化研究フォーラム」（2025年2月15日）において、岸野および小田桐教授の各々の研究報告を通じて提示した。研究を継続的により発展させ、既存理論と異なる視角からアプローチする国際社会論を言語行為論に基づき再構築できる可能性

とその意義について、脅威認識形成・地域的安全保障の枠組み・基地問題・ジェンダー・自然災害などの現代国際社会の重要な論点や諸課題を新たに取り上げ、哲学・理論研究・歴史研究・メディア分析などの多様な研究方法をさらに横断的かつ複合的に用いて検討していくことが、今後（次年度以降）の主な課題である。

7. 大学生の異文化間コミュニケーション能力が異文化受容性に及ぼす影響

○姜京守（外国語学部）

チャクル・ムラット（短期大学部）

吉崎誠（外国語学部）

（プロジェクト概要）

現代社会においては、国際化の進展に伴い異文化間の交流が日常化し、ビジネス、教育、観光など多岐にわたる分野で重要な役割を果たしている。特に、多様な文化背景を有する人々と頻繁に交流する大学生にとって、異文化間コミュニケーション能力（ICC）の向上は、多文化共生社会の調和および発展を促進するための重要な要素である。そこで、本研究では、大学生の ICC 能力と異文化受容性（IE）に着目し、両者の関係性を解明することを目的とした。具体的には、ICC のサブ要因である異文化知識、態度、意識、スキルが、IE のサブ要因である継続的学習、対人関係、ハーディネス（ストレス耐性）にどのような影響を及ぼすかを分析した。研究方法としては、本学の学生を対象に質問紙調査を実施し、収集したデータに基づいてグループ間の平均値および因子間の因果関係を分析し、仮説の

検証を行った。

（プロジェクト成果）

分析結果、ICC のサブ要因である態度、意識、スキルは IE のサブ要因（継続的学習、対人関係、ハーディネス）に正の影響を与えていることが明らかになった。しかし、知識については有意な影響が確認されなかった。これは異文化知識よりも態度、意識、スキルが IE にとってより重要であることを示唆しており、特に異文化スキルの影響が顕著だった。これを踏まえ、異文化知識を態度、意識、スキルの先行要因とする新たな仮説モデルを構築し、追加分析を行った結果、知識がこれらの要素に正の影響を及ぼし、結果的に IE のサブ要因に間接的な効果をもたらしていることが確認された。本研究の成果は、2025年2月15日に開催された「第11回 IRI 言語・文化研究フォーラム」で発表した。また、学会誌への投稿に向けた執筆も進めている。今後は、他国の学生を含むサンプルを用いて、国際的な視点から成果の一般性を再検証する予定である。さらに、AI や SNS などのテクノロジーや社会的支持を ICC の先行要因または調整要因と位置づけた新たな仮説モデルを構築し、検証を進める必要がある。

**IRI 公開講座 William Shakespeare 作
Romeo and Juliet の上演 StagePlay Japan**

1. 日時：2024年5月30日（木）
18：30～21：00
2. 場所：中宮キャンパス 谷本記念講堂

俳優集団「ステージプレイ・ジャパン」による英語劇「ロミオとジュリエット」が5月30日、国際文化研究所の公開講座として中宮・谷本記念講堂で上演された。

英語劇の上演は5年ぶりで、当日は入口に長蛇の列ができた。本学の教職員、学生や枚方市民ら約1,000人が堪能した。



英語劇『ロミオとジュリエット』

IRI セミナー

1. 日時：2024年6月27日（木）
16:45～18:00
2. 場所：中宮キャンパス 5206 教室
講演の言語：英語

タイトル：韓国におけるジェンダー間の賃金格差：航空・ホテル業界の分析結果から
講師：イ・スルギ客員教授（セジョン大学准教授）



イ・スルギ客員教授

韓国では、女性人材の採用や登用をめぐる男女間格差がかなり以前から大きな問題となっている。さまざまな形態の男女間格差の中で、賃金格差はおそらく最も手ごわく、顕著であり、有能な人材の産業界の労働力への参入を妨げている。

韓国のホスピタリティ・観光業界は、有能な人材の確保と維持において深刻な課題に直面しているが、最近のメディア報道（コリアタイムズ、2024年）によると、OECD 諸国 33カ国の中でその格差が最も大きい国は韓国である。こうした問題を受けて、韓国統計庁が発表した2015年から2022年のマイクロデータを用いて、韓国の航空業界とホテル業界の男女間賃金格差が検証された。

データの計量経済分析の結果、両業界ともに性別に基づく分離と賃金格差は顕著であるものの、格差の大きさは、年齢や教育レベルとの交差によっては、OECD 報告書よりも若干小さいことが明らかになった。研究の限界と示唆について、分析結果とともに説明がなされた。

IRI 連続公開講座

1. 日時：2024年12月6日（土）、
13日（土）、20日（木）
15:00～16:30
2. 場所：中宮キャンパス 5206 教室



近藤英俊教授

国際文化研究所の「連続公開講座」が2024年12月6日、13日、20日の3回に亘って行われた。講師は外国語学部教授・近藤英俊、タイトルは「流転の冒険者たち：アフリカの妖術と現代」であった。内容については、1) 今日でもアフリカ各地では、人を危める妖術について信じられている実態を報告し、2) 妖術信仰の本質について考察、3) 進行中の社会変化との関りを具体的に検証した。公開講座の目的は、本学教員の研究成果を通し、広く一般市民に「学び直し」のきっかけを提供することで、本学の地域貢献に資することにある。今回の講座はアフリカの話でありながらも、地域を超えたテーマを含んでおり、単なる好奇心を満たす以上の意義を参加者を感じていただいたことが、アンケートの評価から窺われた。

公開シンポジウム

1. 日時：2025年1月25日(土)
13:00～17:30
2. 場所：中宮キャンパス
マルチメディアホール+オンライン
3. 主催：国際文化研究所・日本学術会議地域研究委員会多文化共生分科会

テーマ：阪神・淡路大震災 30年と次世代の多文化共生～問われる日本の教育と若者の未来～

趣旨：

6,434人が犠牲となった阪神・淡路大震災から、2025年1月17日で30年を迎えた。多くの被災外国人への支援活動や互いの助け合いから「多文化共生」という言葉が全国に広まった。本シンポジウムでは、外国ルーツの若者たちの進路、特に大学進学に焦点を当て、理論よりも先行している現実において、この30年間で何を達成し、何がまだ大きな課題であるのかを、共に考えてみた。

開会挨拶： 竹沢 泰子（関西外国語大学国際文化研究所長／日本学術会議会員）

第一部 映画上映

司会： 吉村 真子

（法政大学／日本学術会議連携会員）

映画1 レモン（制作：松原ルマ 8分）

※東京ビデオフェスティバル優秀作品賞受賞作品

映画2 はざまー母語のための場をさがして (監督：朴基浩 38分)

第二部 シンポジウム

司会：チャクル・ムラット

(関西外国語大学短期大学部)

趣旨説明：竹沢 泰子



竹沢泰子所長

講演1 教育の視点で「多文化共生」の30年を振り返る ～たかとりコミュニティセンターの活動から～

吉富 志津代 (武庫川女子大学)



吉富志津代教授

要旨：

阪神・淡路大震災からの、30年に渡るたかとりコミュニティセンターにおける外国ルーツの子どもたちとの種々の活動について紹

介した。そしてそこから見えてくる日本の教育課題を考えるための問題提起をした。特に言語形成やアイデンティティという視点で、すべての子どもたちの教育を受ける権利が守られる環境は、今後の日本社会の可能性を拓くことになるのではないかと問いかけた。

講演2 多文化共生を、自分の経験から振り返る

松原 ルマ ユリ アキズキ

(広告関連会社員)



松原ルマ ユリ アキズキ講師

要旨：

神戸で南米外国人のサポートに取り組む日系ブラジル人三世の両親を見ながら育ってきた。私自身は外国ルーツの子ども達の経験を映像表現する「Re:C」の活動に携わってきた。かつて支援される子どもだった私は、いま一人の社会人として同様のルーツをもつ子ども達を支援している。そうした経験から、外国ルーツの若者の進路と未来について考えて、様々な問題を提起した。

講演3 外国ルーツの若者にとっての大学進学～母語教室をめぐる映像制作から見えてきたもの～

朴 基浩 (映像作家/NPO 法人
IKUNO・多文化ふらっと)



朴基浩監督

要旨：

「多文化共生」という言葉は、阪神大震災をきっかけに私たちの社会に広がっていった。そこから約30年、今日本では、約293万人の外国にルーツを持つ方々が住まれている。この30年、私たちの社会はどう変化したのか。在日コリアンである自身の視点、そしてドキュメンタリー制作の現場を横断しながら、特に母語の重要性という点から、大学進学などの問題を例にとりながら、「多文化共生」について考えてみた。

講演4 多文化共生の対象外とされる子どもたち～社会統合を高等教育の現場から考える～

稲葉 奈々子 (上智大学/
日本学術会議連携会員)

要旨：

学校に行ってはいけない子どもはいないはずですが。しかし、日本の高校を卒業しても、在留資格がないがゆえに、公立高校の無償化の対象外とされたり、専門学校や大学に受験や入学を拒否される子どもたちがいる。日本の法律や制度が、グローバル化した社会の現

実に適応できていないがゆえに起きている問題として、在留資格がない子どもの高等教育進学の実状を議論した。



稲葉奈々子教授 (オンライン)

全体討論

コメント：清水 睦美 (日本女子大学)

閉会挨拶：竹沢 泰子

第11回 IRI 言語・文化研究フォーラム 記念講演 (公開講座)

1. 日時：2025年2月15日(土)
15:00～16:30
2. 場所：中宮キャンパス ICC6206 教室

テーマ：世界と日本のエネルギー・温暖化政策の最前線～どれくらいCO2削減が必要で、どのようなエネルギーミックスが望ましいか？～

講師：明日香 壽川 (東北大学教授)



明日香壽川教授

エネルギー問題や温暖化問題は、重要であるにも関わらず、具体的な定量的な情報は十分に発信されておらず、誤解も多いように思われる。

本講演では、温暖化は本当？ 原発は必要？ 再エネは使える？ 省エネはもう無理？ 電気代はどうなる？ 停電は大丈夫？ 他の国と比べて日本はどう？ などの多くの人が持つ素朴な質問について説明した。

第 11 回 IRI 言語・文化研究フォーラム

(研究発表)

1. 日時：2025 年 2 月 15 日（土）

10:30～14:50

2. 場所：中宮キャンパス ICC

第 1 室、第 2 室、第 3 室

国際文化研究所の第 11 回「IRI 言語・文化研究フォーラム」（研究発表）は 2025 年 2 月 15 日（土）に開催された。発表は 3 室に分かれて行われた。以下がそれぞれの発表の要旨である。

要旨

第 1 室

1. 言語行為論による災害情報分析——安全保障化としての南海トラフ地震臨時情報をめぐって

岸野 浩一 (外国語学部)

言語哲学における言語行為論を援用し、ある課題が重要な安全保障上の問題として立ち現れる言説過程を析出する「安全保障化 (securitization)」の理論が、国際関係論や安

全保障研究において展開されてきた。当該理論の射程を国際社会の制度分析などへ拡張する近年の先行研究をふまえ、報告者らの共同研究では、「社会を支える制度や文化はいかなる言語行為から正当化されるのか」や「言語行為は対立や紛争とどう関わっているのか」を分析できる理論の構築へ向けて、気候変動・感染症・貿易・軍事同盟などの安全保障化のあり方や事例を分析し、多角的な独自の理論的・実証的検討を進めてきた。

2024 年度の研究成果の一環として本報告では、現代日本における人々の安全に直結する重要な課題である防災に関して、災害情報論の主要な研究に基づき言語行為の観点から考察し、南海トラフ地震臨時情報などの事例分析を通じて、言語行為論から災害情報分析を展開することの意義とその安全保障化論への示唆について議論した。

2. NATO のインド太平洋戦略と地域秩序の再編——安全保障化論の観点から

小田桐 確 (外国語学部)

北大西洋条約機構 (NATO) がインド太平洋地域への関与を模索し始めている。2022 年 6 月の首脳会合で採択した「戦略概念」では、中国について「システミックな挑戦」と明記した。また、インド太平洋に初めて言及し、日本などパートナー諸国との提携強化を謳った。だが、軍事同盟としての NATO の本来任務は集団的な領域防衛であり、想定される敵対国は隣接するソ連・ロシアであった。では、近年、欧州大西洋とインド太平洋の連結性が意識されるようになったのはなぜか。

NATO にとって中国の経済的・軍事的台頭はいかなる意味で安全保障問題であり、いかに対処しうるのか。本報告では、ブザン (Barry Buzan) やヴェーヴァ (Ole Wæver) らコペンハーゲン学派の国際政治学者が提起した分析枠組み (「安全保障化」と「地域的安全保障複合体」) について再検討した上で、NATO によるインド太平洋関与に垣間見える地域国際秩序再編の可能性について論じた。

3. Euro coins: identity and heritage politics

Alexis D'Hautcourt (英語国際学部)

As euro coins have a double-sided system, a common side and a national side, they offer an interesting object of study for examining contemporary European values and identities. In this talk I offered an introduction to my research on euro coins by presenting two test cases. 1. How are women represented on the euro coins? While the European Union often holds itself up as an example, if not a leader, when it comes to gender equality, what visibility does it offer women on its coins? 2. What history and heritage disputes did arise between European countries in the euro coinage system? How were they resolved? European history is characterized by constant wars. I discussed whether it would be possible to present national histories and symbols that are acceptable to all Europeans?

第2室

1. 中国語における隠語の表現方法の考察 — 商業隠語を手がかりに—

李 初梅 (大学院 博士後期課程)

世の中には多種多様な社会集団が存在する。その集団内での交流において隠避性が求められるとき、人々は言語符号に工夫を施すようになり、隠避性の高い言語符号が生まれる。中国語においても、隠語は語彙の一部として使用されていた。しかし、中国語の隠語に関する研究は進められてはいるものの、依然として研究成果が少ないのが現状である。また、ほかの領域の隠語と比べると、商業隠語は社会生活の各方面にわたり、民衆の日常生活や民俗文化、社会心理や時代意識をよりよく反映できる特徴を有している。したがって、本研究では商業隠語を切り口とし、まず、先行研究に基づき、商業隠語の定義を明確化し、先行研究での課題を提示した。次に、関連辞書や文献から商業隠語のデータを整理、統合する。最後に統合したデータを包括的かつ体系的に考察し、その特徴に基づいて分類、検討し、中国語隠語の表現方法およびその基本的な特性を明らかにすることで、中国語隠語研究の分野に新たな示唆を提供した。

2. 中国語初修クラスにおける文法指導の課題と「気づき」による指導の試み—「〈場所〉 + “有” + 〈モノ・ヒト〉」構文を中心に—

吉田 泰謙 (英語国際学部)

相原 里美 (英語国際学部)

場所名詞が主語にたつ文について、その誤用から見えてくる課題を取り上げ議論する。中国語初修クラスの文法指導では、本構文は通常「〈場所〉 + “有” + 〈モノ・ヒト〉」といった文型/語順を提示した上で「その〈場所〉

に〈モノ・ヒト〉が存在する」を表すという指導がなされる。しかしながら、学習者が産出する誤用として、しばしば「〈モノ・ヒト〉＋“有”＋〈場所〉」といったものが見られる。また所在を表す構文「〈モノ・ヒト〉＋“在”＋〈場所〉」を学習した後は、所在を表す構文との混用や「〈場所〉＋“在”＋〈モノ・ヒト〉」といった誤用も見受けられる。そこで、本発表では「気づき」をうながす文法指導（島田 2022）を試みた結果を、本学英語国際学部 1 年次開講科目「基礎中国語」、「初級中国語」を履修する学生を対象に実施した測定テストから分析し、その効果を検証した。これを踏まえ、本構文に関するより包括的な学習指導を提案した。

3. 日英語アナウンスを対象とした音声学的評価法の検証と教育上の実証

前坂 麻実 (大学院 博士前期課程)

小谷 克則 (英語キャリア学部)

大室 剛志 (外国語学部)

本研究の学術的背景として機内アナウンスの評価規準を概観する。実務では発音精度が評価規準である。一方、学術的研究では聴き手の主観や音声の明瞭性が評価規準である。そこで、本研究は以下の学術的「問い」に答えることを目指した。

- ・実務上の評価規準の理論的（調音・聴覚・音響音声学的）妥当性

- ・自動評価法の信頼性・妥当性
- ・自動評価法の発音学習上の有用性

本研究の目的は発音評価法の有用性と実用性を高めることにあった。その学術的独自性

は以下のとおりである。

- ・発音評価を調音・聴覚・音響音声学の多一次的観点から行う点

- ・発音評価の自動化を図る点
- ・自動発音評価法を学習支援ツールへ発展させる点

また、創造性として、音声評価の日常性を高めることにより、声に基づく健康診断や加齢対策の基盤形成に寄与する点が挙げられる。

本研究では以下の内容を明らかにした。

- ・機内アナウンスレッスンを通じ、音声データ収集の効率性を明らかにすること
- ・音声データに基づき、既存・提案評価法の信頼性と妥当性を明らかにすること
- ・音声認識器と解析器を用い、評価法の自動化を図り、その再現性と有効性を明らかにすること

第3室

1. 中級日本語学習者の日常生活における漢字使用について

田嶋 香織 (外国語学部)

宇野 聖子 (外国語学部)

本学留学生別科の中級漢字クラスでは、日本語能力試験 N2 相当の漢字を学習項目として取り上げている。初級クラスが生活漢字を、上級クラスが新聞や小説などの生教材を使用するのは異なり、中級クラスのテキストで扱う漢字語彙には日常で見かける機会の少ない専門的・学術系のもも含まれ、習得した漢字語彙を教室外で使用する機会が限られているのではないかと考えられる。そこで、本研究では、中級日本語学習者が授業で習得し

た漢字を日常生活でどのように使用しているかを調査し、学習内容の実用性やその改善点について検討した。アンケート調査を通じて、学習者の漢字習得の目的、使用頻度の高い漢字語彙、教室内外で役立つ学習活動についての意見を収集・分析し、その結果に基づき、学習者のニーズに即した学習項目の見直しや、教室内外での効果的な学習活動の提案を行うことで、学習者のモチベーション向上および漢字定着を図ることを目指した。

2. 名所旧跡体験と漢字習得 —ナラティブ共有の試み—

永富 あゆみ (外国語学部)

武藤 輝昭 (外国語学部)

John Shultz (国際共生学部)

関西外国語大学留学生別科過半数を占める非漢字圏出身の学習者にとって、漢字習得は負荷が大きい。日本語能力が限定的である入門レベルでは、知的好奇心を刺激する教材も少なく、意欲を失うケースも散見される。一方で、歴史や宗教などの英語開講選択科目(以下、コンテンツコース)では、名所旧跡を訪れ学びを深めているものの、漢字表記に注目するまでには至らない。そこで、コンテンツコース教員と協働し、名所旧跡をはじめ留学生活で遭遇する漢字への気づきを促し、長期記憶につなげる支援を検討した。

具体的には、①動画から日本の昔話の粗筋をつかむ②担当する漢字を学内外で探し、写真を共有プラットフォームにリンクさせる③担当漢字導入授業で、写真を見せて紹介活動を行う④昔話の内容確認や音読活動をする、

という流れである。

学習者のコメントは概ね肯定的であるが、使いにくさが指摘された共有プラットフォームの開発を今後の課題としたい。

3. 関西外国語大学留学生別科日本語科の統一シラバス作成に基づいた中上級日本語教材の開発

高屋敷 真人 (外国語学部)

西郷 英樹 (外国語学部)

倉沢 郁子 (国際共生学部)

向井 絵美 (外国語学部)

関西外国語大学留学生別科の総合中級日本語コース (Japanese 5 及び Japanese 6) と総合上級日本語コース (Japanese 7 及び Japanese 8) では、これまで各コースの担当教員によって日本語教授法、学習法、評価法が異なっていたシラバスの改訂を行い、国際交流基金 (JF) が 2010 年に策定した JF 日本語教育スタンダードと日本語能力試験の該当レベルを参考に、2023 年度秋学期より統一シラバスを作成し試用を始めている。国際交流基金は「CEFR (ヨーロッパ共通参照枠)」を基に日本語の使用場面を想定し、「JF Can-do」としてインターネット上に提供している。本発表は、本学留学生別科日本語コースの中級前期 (Japanese 5) と上級前期 (Japanese 7) における教材開発の実践報告である。今回の新教材開発の過程において、JF Can-do での具体的な言語活動の例を参照し、留学生のコミュニケーション運用能力を高めるため、彼らが日常生活で本当に必要としている文脈からのシラバスデザインを試みた。その作成過程について具体的

な例を挙げながら報告を行った。

4. 大学生の異文化コミュニケーション能力が

異文化受容性に及ぼす影響

姜 京守 (外国語学部)

チャクル・ムラット (短期大学部)

吉崎 誠 (外国語学部)

本研究は、大学生の異文化コミュニケーション能力が異文化受容性に与える影響を解明することを目的として実施された。当初は、日本とトルコの大学生を対象にアンケート調査を行う計画であったが、トルコ側のデータ収集が未完了であるため、本発表では本学の学生 410 名から得られたデータに基づき中間報告を行った。分析結果、異文化コミュニケーション能力の 4 つの下位要素（「態度」「知識」「認知」「スキル」）のうち、「態度」「認知」「スキル」は異文化受容性にポジティブな影響を及ぼしたが、「知識」は有意な影響が認められなかった。「知識」が直接影響しない理由として、単なる知識の有無よりも実践的な態度や認知、スキルが受容性に重要であることが考えられる。その後、知識を「態度」「認知」「スキル」の先行要因とする仮説モデルを用いて再分析を行った結果、知識がこれらにポジティブな影響を与え、間接的に異文化受容性に貢献することが示された。ただし、本研究は本学の在学学生のみを対象としており、その結果の一般化には限界がある。今後は、トルコの大学生を含む、より多様なサンプルを用いた調査が必要である。また、社会的支援を含む調整変数を考慮することで、異文化コミュニケーション能力と異文化受容性の関係

をより深く掘り下げる研究が求められる。

国際文化研究所 (IRI) 共同研究プロジェクトワークショップ

漢字の教え方ワークショップ

—中級学習者への指導について—

11月2日(土)に関西外大日本語教育スタディグループ(有志グループ)主催で、早稲田大学日本語教育研究センター准教授・濱川祐紀代先生を招いて漢字の教え方に関する勉強会を開催した。関西外国語大学留学生別科日本語科教員に加え、他機関で日本語教育に携わる参加者の皆さんと、漢字習得に対する学習者のモチベーション、漢字学習方法、学習指導法等について意見交換を行い、効果的な指導法、漢字指導において重要な点などのアイデアを出し合った。学習者の日本語レベルやモチベーション、各機関の漢字教育への関心度やクラスサイズ等により、教師が提供できる効果的に漢字指導は違ってくるが、参加者皆新しい気付きを得られる有意義な会となった。

◆編集後記◆

国際文化研究所(IRI)のニューズレター第15号をお届け致します。今年度は新型コロナウイルスの制限の無い、完全対面で開催することができました。公開講座や講演会には多

くの方にご参加いただき、盛況のうちに終了することができました。

また、IRI 言語・文化研究フォーラムでは、今年度 IRI 共同研究プロジェクトに採択された7件の研究成果を含む10件の研究発表が行われ、活発な議論が交わされました。この IRI 共同研究プロジェクトから新たな研究のシーズが誕生し、今後の研究を進める上での一助となることを切に願っております。

来年度も、本学の言語・文化に関する研究推進のためにさまざまなイベントを企画できたらと考えております。これからも国際文化研究所の活動へのご支援とご協力をよろしくお願い致します。 (チャクル・ムラット)

Prefatory Note

Yasuko Takezawa

The Intercultural Research Institute (IRI), a central research center of Kansai Gaidai University, conducts a variety of research activities every year. It has a long history spanning more than half a century since its establishment in 1972, prior to the opening of the graduate school. Its mission is to share widely the results of its organized research into the depths of various languages and cultures, and to provide a platform for intellectual exchange, with support and cooperation both within and outside the university. In line with this mission, the IRI has presented research results by faculty and graduate students, invited prominent researchers to give lectures, and held public lectures, symposiums, forums, and seminars for students and the general public. IRI collaborative research projects, language and culture colloquium, regular meetings, and language and culture research forums have been added since 2014.

Our four core goals for the time being are: To promote research and educational exchanges within and outside the university focusing on the fields of language, culture and education.

To further invigorate research activities through collaborative research projects, colloquium, forums, and other research activities.

To study the characteristics of Japanese language and culture by comparing and contrasting them with foreign languages and cultures, and to publish and present research outcomes in the forms of oral presentations, journal articles, and/or academic books both within and outside of Japan.

To contribute to the local community through public lectures, colloquium, forums, and other activities.

The above core objectives cannot be achieved overnight, but can only be achieved through the accumulation of many years of work. While cherishing the tradition established by former Director Hideki Tsukamoto and other predecessors, we held a series of public lectures, symposiums (colloquium), and forums in FY2024.

In addition, we were able to host a Shakespearean play for the first time in five years, which could not be held during the pandemic. We also hosted an IRI seminar, replacing a Reikai, a regular meeting, which had been suspended for many years. It should be noted that the former was a great success with an audience of more than 1,000 people, and

that the IRI seminar by visiting professor Lee Seul-ki was attended by over 30 people, including 19 undergraduate students, who actively asked questions in English. The symposium, conducted in hybrid of face-to-face and online sessions, was attended by participants from abroad as well from various regions of Japan. We also recorded the Forum's commemorative lecture by Professor Jusen Asuka of Tohoku University, to make the record open to the public so that it could be viewed by people from all over the world.

Finally, I would like to express my sincere gratitude to Chancellor Eiko Tanimoto, President Yukio Oba, President Kazuko Tanimoto of the Junior College, all those who spoke and cooperated in various events, and the faculty and staff of Kansai Gaidai University, especially Mr. Naoyuki Fujii, Manager of the Research Support Center, Mr. Yasuhiro Okada, Assistant Manager, and all the staff members of the Media Center.

(Professor and Director of the Intercultural
Research Institute, KGU)

IRI Activities 2024

IRI Public Performance: William

Shakespeare's *Romeo and Juliet* by

StagePlay Japan

1. Date and time : May 30 (Thu.), 2024
18:30~21:00
2. Place : Tanimoto Memorial Hall

A theater-play of Shakespeare's "Romeo and Juliet" by the actor group "Stage Play Japan" was performed on the evening of May 30 at the Tanimoto Memorial Hall as a public lecture hosted by the International Cultural Institute.

This was the first English play in five years, and on the day of the performance, a long line formed at the entrance to Tanimoto Memorial Hall.

IRI Seminar

1. Date and time : June 27 (Thu.), 2024
16:45~18:00
2. Place : Nakamiya Campus, Library & Media
Center 2F #5206

Title : Gender Wage Gap in Korea: Findings from
Airline and Hotel Industries

LEE Seul Ki, Visiting Professor, Kansai Gaidai
University/Associate Professor, Sejong University

In Korea, gender disparities have been a significant issue concerning recruitment and advance of female human resources for considerable time. Among the various forms of gender-based disparities, gender-wage gap is arguably the most formidable and visible, discouraging capable talents from entering the industry workforce.

While the Korean hospitality and tourism industry is facing a serious challenge in securing and retaining competent human resources, recent media coverage (Korea Times, 2024) suggests that in Korea the gap is the greatest among 33 OECD countries. To this end, the gender-wage gap in Korean airline and hotel industries are examined using microdata between the years 2015-2022, released from Statistics Korea.

Econometric analysis of the data revealed that although gender-based segregation and gender-wage gap are significant in both industries, size of the gaps are somewhat smaller than the OECD report with some interaction effects with age and education levels. Limitations and implications are discussed along with the findings of the analyses.

Korea Times, The (2024). "Korea's gender wage gap worst among 33 OECD countries: report" accessed April 4, 2021 at: https://www.koreatimes.co.kr/www/biz/2024/04/602_370268.html

**KGU Intercultural Research Institute (IRI)
& Science Council of Japan (SCJ)**

Joint Symposium (open)

**30 Years after the Great Hanshin-Awaji
Earthquake and Multicultural Coexistence
for the Next Generation —The Future of
Education and Youth in Japan—**

Aim:

January 17, 2025 marked the 30th anniversary of the Great Hanshin-Awaji Earthquake that killed 6,434 people. The term "multicultural coexistence" has spread throughout Japan as a result of voluntary activities to help foreigners who were affected by the disaster and mutual support. In this symposium, we focused on the career paths of young people with foreign roots, especially college education, and together we considered what has been accomplished in the past 30 years and what are still major issues to be addressed.

Opening Address: TAKEZAWA Yasuko,
Director of IRI, Kansai Gaidai University/
Council Member of Science Council of Japan
(SCJ)

SECTION 1: Film screening

Chair: YOSHIMURA Masako, Hosei University/
Associate Member of SCJ

Film 1 Lemon (Directed by MATSUBARA Luma, 8min.)

Film 2 In Between – In Search for a Place for a Mother Tongue (Directed by PARK Kiho, 38min.)

SECTION 2: Symposium

Chair: CAKIR Murat, Kansai Gaidai College

Explanation of purpose : TAKEZAWA Yasuko

Lecture 1

Reflecting on 30 Years of Multicultural Coexistence from an Educational Perspective: Initiatives of the Takatori Community Center

YOSHITOMI Shizuyo

(Mukogawa Women's University)

Since its inception after the Great Hanshin-Awaji Earthquake, I addressd several issues that have become apparent from 30 years of working with children from multicultural backgrounds. This reflection raised awareness of the underlying issues within Japanese education in the context of multicultural coexistence.

With a focus on language development and identity formation, I proposed how creating environments that ensure educational rights for all children can open possibilities for the future of Japanese society.

Lecture 2

Reflecting on Multicultural Coexistence from My Own Experiences

MATSUBARA Luma Yuri Akizuki

(Advertising related company employee)

I grew up watching my parents, third-generation Brazilians of Japanese descent, who were involved in supporting foreigners from South America in Kobe. I myself have been involved in the “Re:C” project, which is a visual representation of the experiences of children with foreign roots. I was once a child who was supported, but now I am supporting children with similar roots as a member of society. In this lecture, I considered the career paths and future of young people with foreign roots based on my experiences.

Lecture 3

College Admission for Young People with Foreign Roots: Insights from a Video Production on Mother Tongue Classrooms

PARK Kiho

(Filmmaker/ Non-profit IKUNO TABUNKA FLAT)

The term “multicultural coexistence” spread throughout our society in the wake of the Great Hanshin Earthquake. Thirty years have passed since then, and today there are approximately 2.93 million people with foreign roots living in Japan. How has our society changed over the past 30 years? I thought about “multicultural coexistence” from my own perspective as a Zainichi Korean living in Japan

and across the field of documentary production.

Lecture 4

Closed Doors to Higher Education:

Undocumented Migrants in Japan

INABA Nanako

(Sophia University/ Associate Member of SCJ)

There should be no children who are not allowed to go to school. However, there are children who are shut out of higher education even after graduating from Japanese high school because they are undocumented migrants. I discussed the current situation of children of undocumented migrants as a problem that has resulted from the failure of Japanese laws and systems to adapt to the realities of a globalized society.

Discussion

Commentator : SHIMIZU Mutsumi (Japan Women's University)

Chair: TAKEZAWA Yasuko

Closing Address: TAKEZAWA Yasuko

The Forefront of Energy and Climate Policy in the World and Japan : How much CO2 reduction is needed and what kind of energy mix is desirable?

Dr. ASUKA Jusen

(Professor, Tohoku University)

Despite the importance of energy and climate policy, there is not enough concrete, quantitative information being disseminated, and there are many misunderstandings.

In this lecture, I discussed the following common questions: Is climate change real? Do we need nuclear power? Can we trust renewable energy? Energy conservation is no longer possible? What will happen to our electricity bills? How does Japan's energy/climate policy compare to other countries?

IRI Collaborative Research Project 2024

The 11th IRI Linguistic and Cultural Forum

Seven projects were selected as IRI Collaborative Research Project 2024, and 10 presentations were made at the IRI Research Forum, including the results of these projects.

The 11th IRI Linguistic and Cultural Forum,

Keynote Lecture

1. Date and time : February 15 (Sat.), 2025
15:00~16:30
2. Place : Nakamiya Campus, ICC 2F #6206

IRI Collaborative Research Project

Workshop

Kanji Teaching Workshop

- Instruction of Intermediate Learners -

Editor's Notes

We are pleased to present the 15th Newsletter of the Intercultural Research Institute (IRI). This year we were able to hold a fully face-to-face event, free from the constraints of the novel coronavirus. Public lectures and presentations were successfully held and enjoyed by a large audience.

The IRI Linguistic and Cultural Forum featured 10 research presentations from the fiscal year's IRI Collaborative Research Project, etc. Lively discussions were held, and we sincerely hope that this program will sow the seeds for future research advances.

We are planning a variety of events in the coming year to further promote language and cultural research at KGU. Thank you for your continued support and cooperation.

(CAKIR Murat)